

大分平野出土の石包丁の地域性

萩 幸 二

はじめに

この稿では、利器としての石器が金属器にその位置を譲ってゆく画期に当たっている弥生時代の代表的な石器——中学・高校の歴史教科書に必ず載る程ポピュラーであり、稲の穂摘具とされる——である石包丁に関して考究してゆくが、帰属時期の確実な資料が僅少なため、当該器種の精密な時期変遷ではなく、周辺他地域との比較を通して、大分平野の地域性を抽出することを目的としたい。

一．研究史

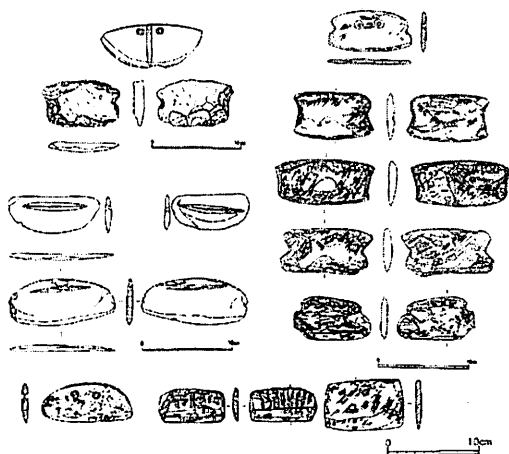
当器種は弥生時代を代表する石器器種のひとつであり、体系的に研究が行なわれるようになったのは一九三〇年代で、森本六爾（森本一九三四）や小林行雄（小林一九三七）が嚆矢を為す。戦後、八幡一郎などが大陸のそれと系譜づけた（八幡一九六四）ことで、石包丁研究の基礎が確定した。その後、九州北部の弥生時代早期の石包丁の実態が明らかになるに連れ、導入期の朝鮮半島との系譜関係が下條信行などによって論じられ（下條一九八〇）、また弥生時代中期以降、立岩産の輝緑凝灰岩で製作され、周辺部に搬出されていることが明らかにされる（中村修身一九八三）など、石材面の研究も行なわれ、石包丁の研究は着実に進展してきている。

二、周辺地域の状況

大分平野で出土する石包丁の地域性を抽出するためにも、ここでは、周辺地域で検出される石包丁の様相を俯瞰してみる。

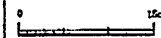
まず、大分県の北西方向に位置し、水稻耕作の先進地域といっている福岡県地域では、磨製で双孔を持ち、両刃を形成するのが一般的で、背部が直線状で刃部が弧状を為す半月形のもの、背部が弧状で刃部が直線状を為す逆半月形、背部・刃部ともに弧状を為す杏仁形の3種が、弥生時代早期から後期までを通して認められる。また、中期以降は飯塚市立岩産を中心とする輝緑凝灰岩製で大量に製作されるようになり、周辺地域にも伴出されるようである（中村修身一九八三）。

次いで、大分県の南方に位置する宮崎県域であるが、時期ごとに見てゆく。弥生早期は半月形、素材の形状を活かした楕円形、背部・刃部ともに直線状の長方形で左右側縁部に抉りの入る、3種が認められ、いずれも磨製・両刃だが、穿孔は見られない。前期は半月形・杏仁形を呈し、磨製・両刃で双孔を持つものしか出土していないが、長方形で両側縁に抉りが入るものは、前後の時期から存在したものと推測される。中期は逆半月形で磨製・両刃・双孔のもの、半月形を呈し、磨製・片刃・両側縁抉りのもの、長方形で磨製・両刃・両側縁抉りのもの、長方形で打製・片刃・片側縁



第1図 宮崎県出土の石包丁

形態 時期	A	B	C	D
I 段階 縄文 晩期後半				 1・2…大洞。
II 段階 弥生前期				3…中寺州尾。
III 前半 前期末 中期前半				4…久米高畑, 5・8…岩崎, 6…久米才歩行, 7・9…宮崎川。
III 後半 中期中葉				 10・12～14・ 16・17…祝谷六丁場, 11…祝谷畑中, 15…防造I。
IV 段階 中期後半 後期中葉				 19・20・24・25・28 …文京, 18・27…西野, 21…祝谷アイリ, 22・29…釜ノ口, 23…釈迦面山, 28…松山大学橋内。
V 段階 後期後半 終末				 30・33…東本, 31…釜ノ口, 32…今在家, 34…風押坂。



第2図 愛媛県出土の石包丁 (加島 2004転載)

扱りの、5種が検出されており、当期から打製や片刃のものが現れる。後期になると、長方形で磨製・両刃・両側縁扱りのものが大半となり、半月形・逆半月形・杏仁形で磨製・両刃・双孔のもの、長方形で打製・片刃・両側縁扱りのものも若干伴う。長方形で両側縁を扱うタイプは、瀬戸内地方の影響であるという(第1図・長津宗重二〇〇四)。

次に、大分県と豊予海峡を挟んで東隣する愛媛県域であるが、本地域も時期ごとに見てゆく。弥生時代早・前期は出土例が少なく、半月形で磨製・両刃・双孔、半月形で磨製・片刃・両側縁扱りの、杏仁形で磨製・両刃・双孔。長方形で磨製・片刃・両側縁扱りの、4種が認められる。中期では、半月形で磨製・両刃・双孔と、杏仁形で磨製・両刃・双孔、杏仁形で磨製・片刃・両側縁扱りの、逆半月形で磨製・両刃・双孔、逆半月形で磨製・両刃・両側縁扱りの、長方形で磨製・両刃・双孔、長方形で磨製・両刃・双孔、長方形で磨製・両刃・両側縁扱りの、6種が認められる。後期では、中期の組成から半月形で磨製・両刃・双孔のタイプが欠落するが、ほぼ同様のものとなっている。中・後期では長方形が大半を占めるようになり、また石材としては緑色系片岩が殆どを占めるようになるという(第2図・鹿島次郎二〇〇四)。

最後に、大分平野を含む豊後地域を概観する。先ず、周辺地域に比べて資料数がかなり少ないと言える。内容的には、殆どが半月形・逆半月形の磨製・両刃のもので、双孔を持つものが一般的だが、穿孔されないものも若干存在する。また、長方形の製品も僅かに存在し、磨製・両刃で、双孔・両側縁扱りの両種が看取される。また、中期のものには、福岡県産と考えられる輝緑凝灰岩製のものも1点ながら検出されている(坪根伸也二〇〇四)。

周辺地域の様相を総合すると、福岡県域では半月形・逆半月形・杏仁形で磨製・両刃・双孔のものが大半を占め、中期以降は立岩産を中心とする輝緑凝灰岩製のものが席卷し、宮崎県域では、早期では資料も少なく、形状は安定せず、穿孔も見られないが、前期になると半月形・逆半月形・杏仁形で磨製・両刃・双孔のものが導入され、中期以降は長方形で磨製・両刃かつ双孔・両側縁扱りのものが大半を占めるようになり、愛媛県域では早・前期では資料も少なく、半月形・杏仁形で磨製・両刃・双孔が導入され始めており、中期以降は長方形・磨製・両刃で双孔と両側縁扱りの、そして緑色系片岩製が大半を占めるように

なり、豊後地域では全時期を通して資料数は少ないものの、半月形・逆半月形で磨製・両刃・双孔が殆どである。何となれば、水稻耕作先進地の福岡県域に対して、他地域では本格的な石包丁導入は後れ、先進地系の半月形・逆半月形・杏仁形の磨製・両刃・双孔のタイプが導入されるが、宮崎・愛媛県域では中期以降、長方形で双孔ないしは両側縁抉りがするようになるが、豊後地域では先進地系タイプを維持し続けるように見える。

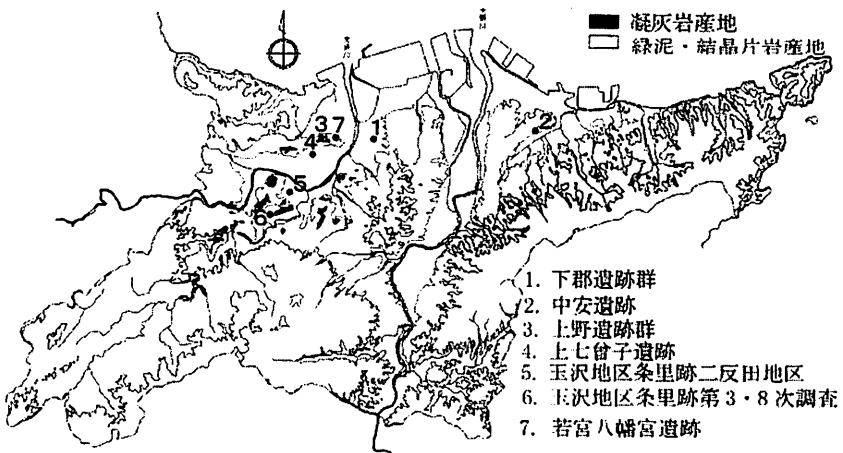
三、大分平野の様相

大分平野は、大分県の中央部に位置し、北に別府湾を臨み、東を丹生台地、南西を九州山地に連なる丘陵地に阻まれ、大分・大野川の二大河川の下流域に形成された沖積平野である。

前掲の坪根による集成の後にも若干の資料が検出されたが、先進地的な半月形・逆半月形で磨製・両刃・双孔のものに偏する嫌いがある。研究者の間では打製の石包丁に類似するものの存在が認識されており、「石包丁状打製石製品」などと称されていた。近年の著者自身の報告で認識された製品も含め、併せて次節以降で検討してゆく。

I. 石包丁及び類似品の提示 (第3図)

本節では、大分平野で出土した石包丁および類似品を具体的かつ詳細に

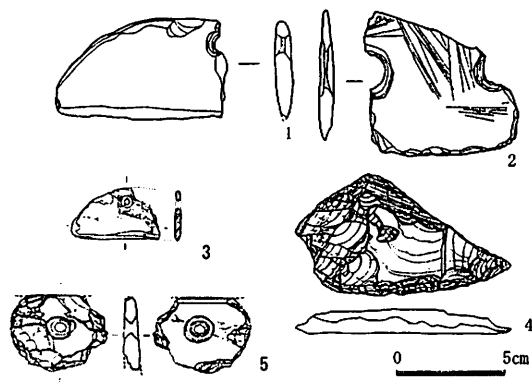


第3図 大分平野における石包丁を及び類似品出土遺跡分布

検討してゆくが、後者については、認定基準をここで示しておく。形態的には石包丁に近い形状を呈していること、縦横比が1：3以上で横長になること、刃部が研磨ないしは二次加工によって形成されていること、そして使用による微細な剥離痕ないしは磨滅痕が認められること、としておく。

①下郡遺跡群(第4図)

1は、弥生時代中期所産の佐賀関産結晶片岩製で、逆半月形を呈し、表・裏面ともに研磨が施され、やはり磨きによって両刃が形成されている。右半を欠損しているが、表・裏面から穿孔した痕跡が残り、原形では双孔を有していたと推測される。2も中期所産の石包丁刃部片で、佐賀関産結晶片岩製で、逆半月形であったと推測される。表・裏面からの2か所の穿孔が半ば残存し、表・裏面ともに全面研磨されている。裏面からの二次加工と裏面下端縁の研磨によって両刃が形成されているが、当初両面への磨きによって形成された刃部を欠損後にリダクションした可能性が高い。3は、佐賀関産結晶片岩製の石包丁である。逆半月形を呈し、表・裏面ともに研磨されており、刃部も磨きによって形成されている。右半を欠損しているが、1か所の穿孔ともう1か所の穿孔の痕跡が認められる。4は、佐賀関産緑泥片岩製の石包丁類似品である。背部が頂点を持つ二辺の直線状から成り、刃部がやや弧状を為し、全体形状が扇形を呈する。表・裏面ともに面的な調整と周縁部の二次加工によって整形されており、刃部は表・裏面からの二次加工によって両刃が形成されているが、右側縁を若干欠損している。刃部には若干の刃毀れが看取される。5は、中期所産の福岡県産と考えられる輝緑凝灰岩製の石包丁の破片で、原形の縁辺が唯一残る上端が直線状であることから、半月形であったと推測される。両面研磨が施され、ひとつの穿孔が残る。但し、上端を除



第4図 下郡遺跡群出土の石包丁及び類似品

く周縁部に表・裏面からの二次加工と表面に平坦加工が為され、石製円盤に再加工された可能性が高い。

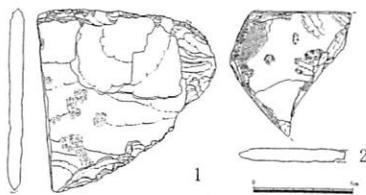
②中安遺跡 (第5図)

1は、佐賀関産結晶片岩製の石包丁類似品で、右半を欠損しているが、半月形を呈していたと推測される。表・裏面に面的な加工と敲打調整、そして周縁部への二次加工によって整形されており、裏面には部分的な研磨も認められるが、穿孔はされていない。また、下端への両面からの二次加工によって両刃が形成されている。2も佐賀関産結晶片岩製の石包丁類似品である。

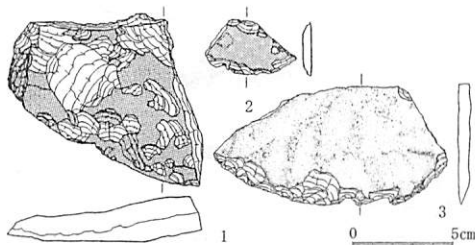
右半を半ば以上欠損しているが、半月形に近い釜形を呈していたと推察される。表・裏面への面的・敲打調整によって平坦化を図り、周縁部へ二次加工を施した後、左右側縁のみ研磨を行なって整形し、下端部への表・裏面からの二次加工によって両刃を形成している。

③上野遺跡群 (第6図1・2)

弥生時代中期所産の安山岩製の石包丁類似品で、上端・右半を欠損しているが、半月形を呈していたと推測される。裏面は礫面を利用して加工が行なわれず、表面のみに平坦剥離及び周縁部に二次加工、更に研磨による整形を行なっている。また、裏面からの二次加工と表面のみへの研磨を施して、裏面の礫面を利用し、両刃に近い分厚い刃部を形成している。研磨は粗く、磨き残しが割合認められ、穿孔は見られない。2も中期所産の佐賀関産結晶



第5図 中安遺跡出土の石包丁及び類似品



第6図 上野遺跡群・上七會子遺跡出土の石包丁及び類似品

片岩製の石包丁類似品の刃部片で、全体形状は判然としない。表・裏面ともに研磨が認められ、それを切る形で裏面からの二次加工によって片刃が形成されている。

④ 上七曾子遺跡 (第6図3)

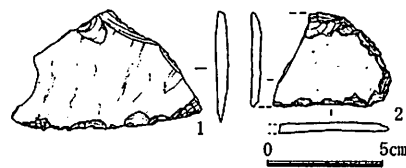
3は、安山岩製の石包丁類似品で、上端・左右側縁を若干欠損しているが、半月形を呈していたと推測される。欠損部分に整形のための二次加工が施されていたと推察される。下端部への表・裏面からの二次加工によって両刃が形成されており、若干の刃毀れも観察される。

⑤ 玉沢地区条里跡二反田地区 (第7図)

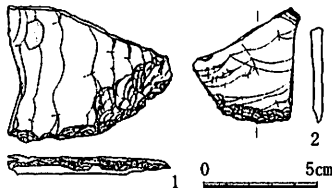
弥生時代早期所産の粘板岩製の石包丁類似品で、左側縁を若干欠損しているが、扇形を呈する。整形加工は認められず、下端への表・裏面からの二次加工によって弧状の両刃が形成されている。刃部には使用による微細な剥離痕が顕著に認められる。裏面左側縁には掛け紐によると考えられる剥離痕が顕著に看取される。2も早期所産の安山岩製の石包丁類似品で、左半を欠損しているが、逆半月形を呈していたと推測される。周縁部のみに二次加工による整形を施しており、下端への表・裏面からの二次加工によって両刃を形成している。

④ 玉沢地区条里跡第3次調査 (第8図)

1は、雄城台産硬質凝灰岩製の石包丁類似品で、左側縁を欠損しているが、扇形を呈していたと推測される。上端は折断加工によって、右側面は面的加工により整形している。主に裏面から二次加工を施し、弧状の片刃を形成している。刃部には顕著な刃毀れが看取される。2は、香川県金山産と考えられるサヌカイト製の石包丁類似品の刃部片で、扇形を呈していたと推測される。上端には折断加工が認められるが、それ以外の整形加工は見られない。下端への裏面からの二次



第7図 玉沢地区条里跡二反田地区



第8図 玉沢地区条里跡第3次調査出土の石包丁及び類似品

加工によって弧状の片刃を形成している。

⑤ 玉沢地区条里跡第8次調査 (第9図)

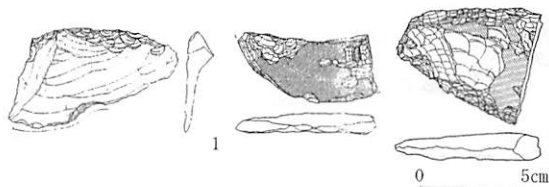
1は、佐賀関産結晶片岩製の石包丁類似品で、やや歪だが長方形を呈していたと推察される。表面に面的な加工を施した後、周縁部に二次加工を行なって整形している。更に下端への表・裏面からの二次加工によって両刃を形成している。刃部には若干の刃毀れが認められる。2は、角閃石安山岩製の石包丁類似品で、右半を欠損しているが、扇形を呈していたと推察される。裏面から周縁部に二次加工を施して整形している。更に裏面からのみの二次加工によって片刃を形成している。

⑥ 若宮八幡宮遺跡第1次調査 (第10図)

1は、香川県金山産と考えられるサヌカイト製の石器。背部にのみ整形加工が施され、刃部側は加工が認められないが、顕著な刃毀れが看取され、横長の形状を呈するので、例外的ながら扇形の石包丁類似品と判定しておく。2は、佐賀関産結晶片岩製の石包丁類似品。上半・右側縁を欠損しているが、半月形を呈していたと推測される。表・裏面に面的調整、次いで周縁部に二次加工、更に表・裏面へ研磨を施しているが、かなり部分的である。そして、下端部表・裏面への研磨によって両刃を形成しているが、二次加工による刃部の付け直しも若干看取される。3は、佐賀関産雲母片岩製の石包丁類似品で、右半を欠損しているが、半月形を呈していたと推測される。表・裏面に



第9図 玉沢地区条里跡第8次調査出土の石包丁及び類似品



第10図 若宮八幡宮遺跡出土の石包丁及び類似品

面的調整、次いで周縁部に表・裏面からの二次加工を施して整形し、そして表面のみに部分的に研磨を行っている。更に、下端部に表・裏面から二次加工を施して両刃を形成している。

II. 石包丁及び類似品の属性分析(第1表)

① 石材について

大分平野で出土する石包丁及び類似品の石材は、大きく5種に分類される。即ち、先ず、大分市東端の佐賀関産石材である結晶片岩、緑泥片岩、雲母片岩などの結晶に沿って薄く剥がれ易い片岩系の石材、次いで、大分市西部の雄城台近辺に産する凝灰岩、次に縄文時代以来、剥片石器にも用いられる香川県金山産と考えられるサヌカイト、更に水稲耕作先進地である福岡県産と考えられる輝緑凝灰岩、そして在地の河原で容易に入手可能な角閃石、安山岩である。前3者は選択的に利用していると推測され、輝緑凝灰岩製品は福岡方面からの製品搬入であると推察される。第1表から判るように、結晶片岩は8遺跡中東寄りの3遺跡に集中して見られ、他遺跡では在地系石材の比率が高くなっており、雄城台直下に位置する玉沢地区条里跡第3次調査では凝灰岩も認められる。一方、大分平野西半の上野遺跡群・玉沢地区条里跡第8次調査でも結晶片岩が検出されており、その波及力の強さが窺える。これは、以前の石錘に関する筆者の考察でも同様の石材の様相が判明している。

第1表 大分平野出土の石包丁及び類似品の属性

遺跡名	図版番号	時期	石材	形状	研磨	穿孔	刃部	形態
下郡遺跡群 第3次	第2図①	弥生中期	結晶片岩	逆半月形	表・裏面全面	2?	両刃	②
	第2図②	弥生中期	結晶片岩	逆半月形	表・裏面全面	2	両刃	②
下郡第13次	第2図③		結晶片岩	逆半月形	表・裏面全面	2	両刃	②
下郡第25次	第2図④	弥生中期	緑泥片岩	扇形	無	0	両刃	⑥
下郡第69次	第2図⑤		輝緑凝灰岩	半月形	表・裏面全面	2?	両刃	①
中安遺跡	第3図①		結晶片岩	半月形	片面部分	0	両刃	④
	第3図②		結晶片岩	半月形	表・裏面部分	0	両刃	③
上野遺跡群	第4図①	弥生中期	安山岩	半月形	表・裏面全面	0	両刃	③
	第4図②	弥生中期	結晶片岩	?	表・裏面全面	0	片刃	?
上七倉子遺跡	第4図③		角閃石安山岩	半月形	無	0	両刃	⑤
玉沢地区条里跡2反田	第5図①	弥生早期	粘板岩	扇形	無	0	両刃	⑥
玉沢地区条里跡第3次	第5図②	弥生早期	安山岩	逆半月形	無	0	両刃	⑤
玉沢地区条里跡第8次	第6図①		凝灰岩	扇形	無	0	片刃	⑦
若宮八幡宮遺跡	第8図①		サヌカイト	扇形	無	0	片刃	⑦
	第8図②		結晶片岩	長方形	無	0	両刃	①
若宮八幡宮遺跡	第8図③		角閃石安山岩	扇形	無	0	片刃	⑦
	第8図④		サヌカイト	扇形	無	0	片刃	⑦
若宮八幡宮遺跡	第8図⑤		結晶片岩	半月形	表・裏面全面	0	両刃	③
	第8図⑥		雲母片岩	半月形	片面部分	0	両刃	④

② 形態分類

全体形状・研磨整形の様相・刃部形態・穿孔の有無を基準として形態分類を行っていく。

まず、全体形状的であるが、周辺地域の様相で述べたように、半月形、逆半月形、杏仁形が農耕先進地である福岡系——延いては大陸・朝鮮半島系と見られるのに対して、半月形・逆半月形・杏仁形を受容しつつも、中期以降は長方形が主体を為すのが宮崎・愛媛県——西瀬戸内系と考えられる。大分平野では、半月形が7点、逆半月形は4点、扇形が6点、長方形が1点、不明が1点となっており、福岡系の半月形・逆半月形——杏仁形を欠くが——主体を占め、独自形の扇形がそれに次ぎ、西瀬戸内系の長方形は僅少である。

次いで、研磨の様相だが、両面研磨が各周辺地域ともに大部分を占める。大分平野では、両面全面研磨が7点、両面部分研磨が1点、片面部分研磨が2点、研磨整形なしが9点と、打製が最も多く、両面研磨が次ぎ、部分研磨——未成品ではなく、使用痕も認められる——が若干伴う。つまり、周辺地域の主体を占める両面研磨ではなく、大分平野独自の打製・部分磨製が優勢となっている。が、他地域では打製の石包丁類似品は摘出されていない可能性がある。

刃部形態については、やはり周辺地位では両刃が大半を占めているが、宮崎・愛媛県域では片刃も少なくない。大分平野でも両刃が14点、片刃が4点、刃部形成なしが1点で、前者が優位を占め、周辺地域と同様となっているが、片刃も二割以上に達し、決して少なくなく、西瀬戸内的であると言える。

穿孔に関しては、福岡県域では殆どが双孔を有し、宮崎・愛媛県域では、穿孔の代用としての両側縁挟りが、双孔を有するものと拮抗するか、やや凌ぐ様相となっている。大分平野では、双孔を有するものが4点、穿孔しないものが15点と後者の非率が圧倒的に高く、周辺地域と異なる様相を示す。

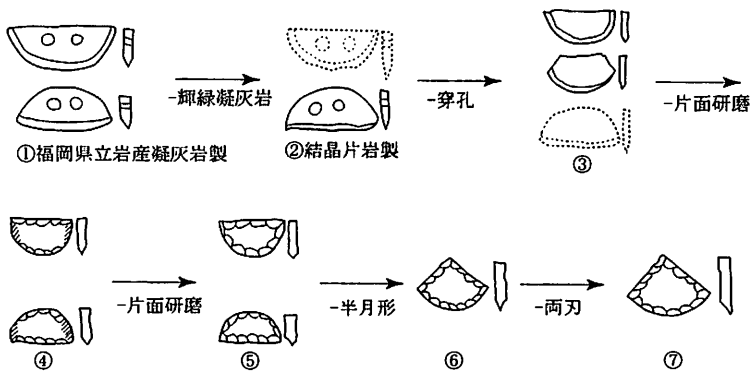
③ 属性に表れる意味

ここでは、石材・形態分類といった属性から、大分平野出土の石包丁及び類似品の地域性とその意味について検討してゆく。

先ず、形態分類について総合すると、大分平野で出土する石包丁及び類似品は大きく3種に分けられる。即ち、半月形ないしは逆半月形で片面研磨・両刃・双孔の福岡系のもの(4点)、扇形を呈し、打製・穿孔なし——片刃・両刃が相半ばする——の大分平野独自のもの(5点)、そして半月形ないしは逆半月形で(部分を含む)研磨か打製・両刃・穿孔なし(8点)の中間形の、3種である。石材的には、福岡県産の搬入品と考えられる輝緑凝灰岩製と香川県金山産サヌカイト製が各1点検出されて入る以外は、佐賀県産の片岩系石材・雄城台産凝灰岩に代表される地元の選択性の強い石材に、在地系の安山岩系の石材であり、いずれも地域性の強い石材を使用していると言える。

即ち、形態・石材の両要素とも、福岡系を受容しつつも独自性が強いと言えるが、福岡系の石包丁と大分平野的な石包丁類似品はどのような関係にあるのだろうか。福岡系石包丁、大分平野独自の石包丁類似品、その中間形の存在から、それらを整理して、福岡系の要素の脱落という視点から、大分平野独自のものへの移行を見てゆく(第11図)。

先ず、①福岡系は、既述のように福岡産の輝緑凝灰岩製で、半月形・逆半月形——杏仁形は大分平野で出土例がないので除く——を呈し、片面研磨・双孔穿孔・両刃である。次いで、①から福岡県産の輝緑凝灰岩製という石材的要素が脱落したものが②で、形態的には①と同様で、形態①・②を併せて西北九州型と仮称しておく。次に、②から双孔穿孔という要素が欠落したものが③であ



第11図 西北九州海石包丁から大分平野型石包丁状打製石製品への移行模式図

る。更に、③から片面研磨の要素が欠落したものが④である。そして、④から研磨の技術が全く喪失したものが⑤である。その上に、⑤から半月形・逆半月形という形状が扇形に転化したものが⑥である。最後に、⑥から刃部形成の過程を半分省略し、刃部形態が両刃から片刃に退化したものが⑦である。穿孔・研磨整形の喪失、刃部形成過程の省略化と、①・②の西北九州型の要素が全て欠落した形態で、⑥と併せて大分平野では最も多い形態で、大分平野的といえ、⑤・⑥を総じて大分平野型と仮称しておくこととする。

④時期について

所屬時期については、出土状況などから、判然としないものが多い。時期が確定しているものから考えると、西北九州型Ⅱ形態①・②である下郡遺跡群の3点(第4図1・2・5)は中期の所産と報告されているのに対して、玉沢地区条里跡二反田地区出土の2点(第7図1・2)は包含層出土で、共存土器から縄文時代晩期から弥生時代早期と考えられ、1点は石材・研磨・穿孔の要素が脱落した形態⑤で、もう1点は更に形状が扇形となった形態⑥の大分平野型である。

即ち、西北九州型が新しく、大分平野型の方が格段に古い。勿論、現況で出土していなくても存在しなかったとは断定できず、早期にも西北九州型が齎されていた可能性は、周辺の宮崎・愛媛両県の状況からしても考えられる。しかし、坪根の集成を見ても、大分平野は勿論、豊後地域に目を拡げても西北九州型は前期末以降に限られ、福岡県域で中期以降に輝緑凝灰岩製の石包丁が大量生産化される時期と一致しており、福岡県域の影響の拡大が窺える。従って、早期から前期にかけては大分平野では、西北九州型よりも大分平野型や中間形態が主流を成しており、中期以降福岡方面の影響の拡大によって西北九州型が増加したものと推察される。その際、唯一の形態①が検出されている下郡遺跡群などが、福岡方面の文化・技術流入における拠点遺跡の役割を果たしたものと考えられる。

まとめ

前章までで、大分平野で出土する石包丁及び類似品について概観してきた。大分平野を含む豊後が、大陸に直結し、水稻耕作先進地の福岡方面の石包丁の製作技術の強い影響下にあり、同様にその文化波及を受けながらも、長方形で両側縁取りタイプに代表される独自の石包丁文化を形成していった、宮崎・愛媛県域などの西瀬戸内地域とは様相が異なること、一方で、佐賀関産結晶片岩に代表される在地系石材を用い、大分平野型と仮称した打製の石包丁類似品が多数を占めるなど、独自性も決して弱くないことも検証して得たと考える。

だが、大分平野型と仮称した石包丁類似品が、大分平野独自のものなのであろうか。結論的に言えば、そうではないと推察される。何故なら、典型的な器種の形態か製作の中心地域から遠退るにつれて、簡略化・退化・変容してゆくという現象と両者の中間形態の誕生は、いつの時代、いずれの地域の石器にも現れ得るものだからである。従って、いずれの地域においても、多寡の差はあれ、実際には独自の簡略形が存在するが、研磨・穿孔などの典型的な資料のみが注目されて、打製・研磨・穿孔のないものは意識外に置かれ、或いは未成品とされてきた可能性が高いものと思われる。大分平野では典型的な石包丁が僅少なために、その補完のために広範囲な探索の必要に迫られたが故に、筆者などによって検出されたものと考え。ことに西北九州を除く農耕先進地でない地域での、大分平野型的な打製の類似品にも注目が集まることが望まれる。

だが、大分平野を含む豊後地域は、石包丁の出土点数が五千点を超えるとされる福岡県域はもとより、宮崎県・愛媛両県域、また豊前といった周辺地域より石包丁の出土例が格段に僅少であることも確かである。これは、少なくとも鉄器の増加する弥生時代後期以降にならないと、水稻耕作は盛んにならなかつたものと推察され、これも大分平野を含む豊後地域の地域性の一つに付け加えられると言えそうである。

【参考・引用文献】

- 荻 幸二 二〇〇六 「第V章 第2節 2. 大分平野出土の石包丁ないしは類似品に関する考察」『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第68集 下郡遺跡群 IV』 大分市教育委員会
- 鹿島次郎 二〇〇四 「伊予における石包丁の展開」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』
- 小林行雄 一九三七 「石包丁」『考古学』八一—七
- 下条信行 一九八〇 「東南アジアにおける外湾刃石包丁の展開」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
- 坪根伸也 二〇〇四 「豊後における石包丁の展開」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』
- 長津宗重 二〇〇四 「日向における石包丁の展開」『西南四国—九州間の交流に関する考古学的研究』
- 中村修身 一九八三 「いわゆる輝緑凝灰岩製石包丁の再検討」『地域相研究』第13号
- 平井 勝 一九九一 「IV. 1. 1 石包丁」『考古学ライブラリー64 弥生時代の石器』
- 森本六爾 一九三四 「石包丁の諸形態と分布」『日本原始農業新論』
- 八幡一郎 一九六四 「古代收穫具石包丁の系譜—安志敏『中国古代刀』の紹介を兼ねて」『日本歴史論究・考古学民俗学篇』